

盲先覚者伝記シリーズ

3

KUMAGAI TETSUTARO

熊谷鉄太郎

見果てぬ夢

玉田敬次



盲先覚者伝記シリーズ

3

KUMAGAI TETSUTARO

熊谷鉄太郎

見果てぬ夢

玉田敬次

推薦のこ ば

日本盲人福祉委員会理事長 実 本 博 次

国連が、1981年を国際障害者年に制定したことにもみられるように、近年、社会の障害者観は大きく変貌しつつあります。特に、文化が深く根をおろした所では、かつてのように、障害者を憐憫の情のみで救済の対象とする風潮は消滅した、といっても過言ではありません。こうした国際的な障害者観の大きな流れの中で、わが国でも障害者の生活は、日一日と社会に統合され、生きがいのある自立したものになりつつあります。

しかし、一時代前に目を転じたとき、今でも民度の低い地域がそうであるように、障害者に対する物心両面からの抑圧は想像に絶するものがありました。視覚障害者だけに限っても、先人が残した心のひずみの記録は、いくらかでも数え上げることができます。同じ障害を持ち、悩みを分かちあえる者が、自ら先頭に立って、いばらの道を切り開いていかない限り、同じ運命に悩み、苦しむ者に光を当てることができない時代であったと言えます。

わが国でも、そのように自らの障害を克服した先覚者は、多数輩出しています。視覚障害者の世界でも、古くは塙保己一、杉山和一といった偉人から、現代の盲人文化や盲教育の基礎を築いた先達まで、数え上げれば枚挙にいとまがありません。

しかし、残念なことに、ごく卓越した人物を除いて、その人の偉業と人となりを伝えるものはあまり残されていません。半ば伝説化した中で、その人の業績が風化しつつあるというのが実状のようです。特に、現代の視覚障害者の生活に直結するような業績を残した近代の先覚者に、その感が深いと言われます。じかに聲咳に接した方々の証言を、今集めておかなければ、やがて忘却のかなたに押し流され、先達の偉業を正しく後世に伝えられなくなる、そんな状況にあるように思われます。

こうした折に、日本盲人福祉研究会が、この伝記シリーズを企画し、刊行

することは誠に時宜に適し、大いに意義のあることと思います。こうした地道な仕事を続けておられる同会に対し、深甚なる敬意を表するとともに、視覚障害者の方には、先輩の不屈の闘志とそのさわやかな人生を知っていただくために、また、視覚障害者の諸問題の解決に当たっておられる方には、指針を得るための座右の書として、本書を推薦する次第です。

ま え が き

日本盲人福祉研究会会長 本 間 一 夫

とことわに父のみむねに抱かれて
みかおを仰ぐ夢安らけき
得べくんばまたもめしいと生れ来て
見はてぬ夢の後を追いなん

この2首の歌は、熊谷が晩年の静かな環境の中で詠まれたものである。1首は盲牧師として生涯を闘い通し、最後に行きついた安らぎの心境をうたったものであり、他の1首はこれとは対照的に、盲目の後輩たちのために、もっともっと多くの仕事をしたかったという願望をこめたものである。待に、「またもめしいと生れ来て」というあたりは、われわれ凡人には計り知り得ない境地である。

明治16年、文化の光のなお届かなかった北海道の貧しい漁村に生れ、幼くして天然痘にかかって失明し、両親とは生き別れるなど、熊谷の少年時代は逆境そのものであった。そうした中から志をたて、努力に努力を重ね、明治、大正、昭和の三代にわたって、身をもって盲人の人間復興のため、数々の足跡を残されたのである。その意味では、熊谷の右に出る者はない。

今日とは異なり、盲人に対する社会的関心の全くなかった大正2年に、関西学院神学部入門を叩き、盲人として初めて大学入学を勝ちとったのは熊谷であったし、昭和6年ニューヨークで開かれた盲人福祉の国際会議に、日本代表として出席し、抜群の英語力を駆使して、万丈の気を吐いたもの熊谷であった。これによって当時の盲青年たちが、いかに激励され、またそれがいかに彼らの憧れの的であったかは言うまでもあるまい。

今一つ特筆しなければならないのは、熊谷のタイ国盲教育への貢献である。それは戦時中の国策にそったものであり、ごく短期的に終わっているのに、花

咲き実を結ぶには至らなかったが、書き残しておかなければならない重要な事柄である。すでに敗色が濃く、途中の危険の伴う時期であったにもかかわらず、彼は一家を引きつれて、はるばる海を渡ってタイ国の盲教育のために出かけたのである。彼の胸中には明治の中期以後、日本の盲教育が外人宣教師たちの働きによって、その曙を迎えたことに対する感謝の思いがひそんでいたであろう。この意味において、満州国における大村善永一家の献身と好一對の盲牧師の壮挙であろう。

私が初めて熊谷に接したのは、昭和9年、まだ学生のころ、函館のメソジスト教会に伝道に来られた時であった。盲人はみな、あん摩・はり・きゅう業だと思いこんでいた私にとって、その前年の岩橋武夫との出会いと共に、全く新しい世界への開眼であった。またその翌日、わざわざ盲学校に来られ、自身の苦闘を淡々と語られたのを聞いて、〈努力さえすれば〉という私自身の可能性をも発見できたのであった。さらに熊谷は、その若き日に聖書のヨハネ伝第9章を読んで、「みずからの盲目の意味をまるで雷にうたれたように悟った」と力強く語られるあたりは、私の生涯にも決定的な影響を及ぼしたのである。

96年の熊谷の生涯は、このように輝かしい偉大なものであったが、同じ北海道出身ということもあってか、特に私には心をかけて下さった。関西で勉学中も、東京に出て点字図書館を始めてからも、度々ご家族と共に来宅され、その団欒は楽しいものであった。そんな時よく、「盲人の中には第六感という以外名づけようのない特別の感覚をもった者がいる。盲人はもっともっと、触覚その他の残された感覚を訓練することによって、そうした感覚を得られるのではなからうか」とか、「盲人が多くの仕事ができるかどうかは、人の目をどれだけ使わせてもらったかの量に正比例する」などは、豊かな示唆に富むものとして忘れることができない。

本書はわが日本盲人福祉研究会が、テレビ朝日福祉文化事業団の援助を得て、企画発行している〈盲先覚者伝記シリーズ〉の3冊目である。熊谷と同

じ牧師の聖職にある上に、熊谷の女婿にあたる玉田敬次氏が執筆の労をとられたことは、まことに適切であり感謝にたえない。伝記としての内容がきわめて正確であるばかりでなく、非常に興味ふかく読まれたことは喜ばしい限りである。

目 次

序	1
第1章 生いたち	
1. 誕 生	3
2. 別 離	5
3. 失 明	7
4. 再び北海道へ	8
第2章 少年の頃	
1. 少年の頃	10
2. 新しい母	11
3. 小学校	12
4. 鍼按の修業	13
5. 点字との出会い	14
6. 帰 郷	14
第3章 ころざし	
1. ころざし	17
2. 故郷脱出	18
3. 独立の生活	19
第4章 キリスト教との出会い	
1. 札幌へ	23
2. キリスト教との出会い	25
3. 北盲学校	30
4. 教会生活	32
5. 神のみわざ	35

6. 洗 礼	37
7. 東京盲啞学校へ	38

第5章 東京盲啞学校の生活

1. 入 学	41
2. 盲教育界の旋風	42
3. 英語の勉強	45
4. 本郷中央教会	49
5. 盲啞学校後半の生活	51

第6章 教師から高等教育へ

1. 卒業と就職	54
2. 神学部入学	57

第7章 牧師の働き

1. 牧師就任	59
2. 結 婚	60
3. 岩橋武夫氏との出会い	62
4. 盲人文化運動	64
5. 転 任	66
6. 国際盲人奉仕者会議	67
7. その後の教会	70
8. バンコックの生活	72

第8章 戦後の時代

1. 戦後の生活	75
2. 盲人伝道協議会	78

第9章 晩年	
1. 老人ホーム	81
2. 見果てぬ夢	85
参考文献	87

序

昨年の6月15日、芦屋キリスト教会において、点字毎日2代目編集長・故大野加久二氏の告別式が行われた。葬儀に出席された日本点字図書館館長・本間一夫氏が、終って私の家に立寄られた。その際本間氏から、同氏が会長をしている日本盲人福祉研究会から、盲先覚者の伝記シリーズを出版する計画をしているので、私に熊谷鉄太郎伝を書くようにといわれた。私は、しばらく考えた後、1冊の本を書くには非力であること、今仕事が多忙であること、そして熊谷は、妻の父であることから、主観的になるのではないかと思いい辞退した。

本間氏が帰られてから、2、3日そのことについて考えた。私の仲人である大野加久二氏の葬儀の中で、式辞と弔辞の数名の方々が大野氏の日本盲界における大きな働きと貢献をたたえ、その意志を受けついでいく決意を述べられた。私もそうしなければならないと強く感じた。また熊谷は、「闇を破って」と「薄明の記憶」の自叙伝を残しているので、熟年までの歴史はよく知られている。しかし晩年の生活についてはあまり知られていない。それを知っているのは、私たち夫婦と妻の姉である。そうしたことを考えると、非力を省みず、熊谷伝を書く使命があるのではないかと考え、本間氏に承諾の意を伝えた。

昨年の9月に、正式に執筆の依頼を受けた。しかし、私は日本基督教団芦屋三条教会の牧師としての本業のほかに、同兵庫教区の各種伝道委員、日本盲人キリスト教伝道協議会の中央委員、同実務委員、芦屋市視力障害者の会の会長、同福祉事務所の身体障害者相談員、兵庫県盲人福祉協会の評議員をしている。その上、一昨年から障害者問題との取組みから、日本基督教団の教師委員の責任を与えられ、毎月のように東京に出かけることとなり、多忙な日々を過していた。そのため、心にかかりながら、なかなか執筆にとりかかることができなかった。ようやく、今年の6月になってから書きはじめることができた。

そのような事情で、執筆の期限に大幅に遅れ、まことに心苦しく思っている。また、本書の執筆にあたって、熊谷の2冊の自叙伝のほか、日本メソジスト教会や日本キリスト教の歴史書、その他、熊谷が関係した教会のうち2、3の教会の記念誌を参考にした。時間のゆとりがあればほかにも参考になる文献を集め、調べたいと思っていた。しかし、ゆとりがないためにそれができず、不十分なものしか書けなかったことを残念に思っている。

熊谷は、青年時代に札幌教会においてキリスト教の信徒となり、更に牧師としての生涯を過した。執筆者もまた牧師である。そのことから、キリスト教の色彩の強い内容になることはまぬがれない。

しかし、本書はキリスト教の証しの書ではない。盲先覚者の伝記である。従って、私はできるだけキリスト教の色彩が濃くなることをさけ、可能な限り第三者的・客観的に記すようにところがけた。しかし熊谷の生涯の現実から、キリスト教の内容が多く記されていることをお許しいただきたい。

本文にも記したように、熊谷の願いと目的は、たとえ盲人であっても一人の人間として、晴眼者と同じように人間らしく生きることであり、また、人間らしく生きるために社会の理解を得ることであった。そのために熊谷は、盲人の教育・文化・福祉にも強い関心を抱き、その運動にも参加した。その点にも力点をおいて記したつもりである。

熊谷の生涯を描いた本書の内容が、今日において盲人が生きる上に、社会の盲人理解の上に、そして健常者にとっても、人生を生きる上に、何らかの意味で役立てば幸いである。

1984年12月1日

玉 田 敬 次

第1章 生 いた ち

1. 誕 生

熊谷鉄太郎は、1883年（明治16年）5月28日、北海道の西南にある、瀬棚^{せのう}郡美谷村^{びやわら}に生まれた。函館から小樽に行く途中の漁村であった。父西藏^{とりざう}、母さだの長男であった。

鉄太郎が生まれた当時の家は、大家族であった。祖父金次郎、祖母まさ、父母、父の妹夫婦とその子供、父の弟2人、その他に数人の使用人がいた。ところが、この一家は、全く修羅場のような生活であった。毎日、朝から晩まで、争いの絶え間がなかった。それは父の放蕩からくるものであった。

鉄太郎の父は、放蕩に身を持ちくずしていた。そのため、祖父は心配する。心配が高じて怒りに変わり、争いが起り、それが毎日の日課であった。

祖父は、立志伝中の人であった。幼くして父母を失い、頼るべき所もなく、4、5年の間、さすらいの時を過した。その後、故郷の青森県から北海道松前のにしん場に、人夫として雇われて行ったのは、14歳の年であった。懸命に働いた結果、成功する時がきた。「金次郎船頭」の名は、にしんの神様と言われた。そのため、多少の蓄財もできた。

祖父に、4人の子供があった。長男は、鉄太郎の父、2番目は女で、鉄太郎の生まれた頃には、すでに嫁いでおり、鉄太郎より一つ年上の女の子があった。3番目は、次男三次郎であった。4番目の勝三郎は、おとなしい少年で、両親の愛と希望を一身に受け、他の兄弟達の羨望の的になっていた。

ところが、苦心に苦心を重ねて築上げた折角の名誉も財産も、人もあろうに、家の支柱であるはずの長男西藏によって、ことごとく失われてしまった。怒るのは、むしろ当然であった。

しかし、静かに考えてみると、父の乱行にもまた同情すべき点があった。

それは、彼の両親もまた、たしかに彼に対して、負わねばならない責任があった。それは、どうしたものか、小さい時から両親に冷たくされ、相当に働く頭脳を持ちながら、家中の者から、常に軽視されていた。「子守りばかりさせられていて、何一つ、まとまったものを覚えさせてもらうことができなかった。」と、後年彼の口から、しばしば聞かされた。

それが長ずるに従って、妹や弟に注がれる親の愛、殊に末の弟に注がれる、両親の偏愛を見せつけられては、家を空けて放蕩に身を持ちくずすようになったことも、あながち無理ではなかったと思われる。

しかし、一番かわいそうであったのは、母である。他の人達の苦しみは、言わば、身から出た錆である。親であり子である以上、良くも悪くも、それに対する責任を負わなければならない。しかし、母の場合、これとは違う。たまたま通りかかったのが身の不運であった。強いて負わされた十字架の、堪えがたい重さに悩まなければならなかった。そもそも彼女は、古い結婚の風習の犠牲であった。

「嫁でももらってやれば、息子の身持ちも少しはよくなることだろう。」という考えは、もらう方にとっては、もっともなことかもしれないが、もらわれる方にとっては、まことに迷惑な話である。

祖父母は、こうした勝手な御都合主義から、あちらこちらと物色の網を張って、適当な女を求めていた。そうした所に、ちょうど通りかかったのが母である。適当と認められたのが運のつきで、網の中に、身動きもならないように入れられてしまった。

ところが、事実は予想を裏切った。嫁はもらったが、息子の乱行は少しも直らなかった。否、かえってますますのっていくばかりであった。親馬鹿は、人の世の常である。息子の行状の改まらないのは、嫁のつくし方が足りないからであると、舅、姑は失望した。失望は、やがて言葉にも動作にもあらわれてくる。しかし、とがりきった神経の持主である舅、姑の御機嫌をとりながら、荒れ狂う若い夫の乱行を制御するには、彼女は、あまりにも幼かった。

鉄太郎を生んだのが16歳の5月であったから、嫁にきたのは、14歳の冬か

ら15歳の春までの間であった。期待を裏切られた舅、姑の失望と、夫の乱行の間に板ばさみになって、悶え苦しんだのである。このような中で、鉄太郎が生まれてきた。

鉄太郎の誕生は、父にとっては、軒下の雀の卵から雛がかえった程の出来事ではなかったが、祖父母には、大いに歓迎された。従って、幾分母の苦しみを緩和することができたものと思われる。それでも、毎日の生活は変らなかった。西藏はあいもかわらず、昨日は博打、今日は酒と狂いまわる。祖父の生命の結晶であった少しばかりの財産も、日に日に消耗するばかりである。鉄太郎の4歳の春までには、次第に傾いていく家は、とうとう突っかい棒がきかなくなってしまった。

いやがうえにも、とがりきった神経に、こうして毎日毎日、やすりをかけられるのだから、たまったものではない。何かにつけて祖父は、朝から晩まで怒りどおしである。息子の顔を見れば、むらむらと、怒りが炎のようにわいてくる。一言二言交わす間もなく、爆発する雷のようなすさまじい声が、隣近所までもひびきわたる。子供達の泣き叫ぶ声、うろたえさわぐ家族の声。隣近所から馳せ集ってくる親切な人達の仲裁など、喧々囂々けんけんごうごうのさわぎであった。しかも、こうした場面がいつもくり返されているのだからたまらない。家族中、誰一人として、心の安まる者がなかった。小さな物音にも、ドキリと胸をさされるのであった。

このような状況が、鉄太郎の生まれてきた世界である。こうした世界に起ってくる一つ一つの出来事が、感受性に富んだ幼児の魂に、永遠に拭い去ることのできない影響を与えていくのである。たとえ記憶として残ってなくても、潜在意識の底に深く沈んで、鉄太郎の人格の基礎をなすに至るのである。後年の鉄太郎の不屈の精神は、祖父の資質と共に、このような境遇の中から生まれていったものと思われる。

2. 別 離

鉄太郎が3歳の春を迎えた時、母との別離の悲しみを経験した。放蕩する

ことよりほかに何も知らない夫の将来に、早くも見切りをつけた母は、1日も早く、地獄から逃れて、自由の地に新しい空気を呼吸することを望んでいた。しかしながら、鉄太郎という足かせがあるために、今日は逃げ出そうか、明日は暇を乞おうかと思いながらも、3年の苦しい月日を過さなければならなかった。

もう大丈夫だ。乳を離しても子供は育つと考えた時、彼女は、ついに意を決してこの家を去った。後ろ髪を引く幼い手をふりはらって出ていかなければならなかった彼女の切なさに、後の鉄太郎は、むしろ同情していた。

むりやり、母をもぎとられた幼い手は、祖父のふところに、愛の泉を求めたのである。息子は憎くても孫は可愛い。ことに、母に置き去りにされた孫は、不憫でならなかった。祖父は、鉄太郎を背中に背負ったり、ふところに抱いたりして離さなかった。

祖母は、この頃から、病の床に親しみがちであった。従って、あまり鉄太郎を世話してやることができなかった。このようにして、この年も過ぎていった。そして1886年（明治19年）、鉄太郎は、4歳の春を迎えた。

その頃祖父は、網元の総支配人をつとめていたのであるが、止まるところを知らない息子の放蕩が、ついに主人の家の財産にまでくい込んでいくので、責任をとって、辞職した。もちろん、自分の家はまるつぶれである。

祖父の一家は、一艘の漁船に、残った家財道具を積みこんで、住みなれた美谷の浜辺に別れを告げた。10人ばかりの一家族を乗せた小船は、北海の荒海を、海岸伝いに青森に向かった。何のために青森へ行ったのか、それは、鉄太郎にはわからない。しかし青森は、祖父の生まれ故郷ざる石に近く、祖母の兄もここにいる。その他2、3の遠い親類もあったらしい。ここでしばらく息抜きをするつもりであったのかもしれない。

青森の町からほど遠くない筒井村に、ある資産家がいた。それが遠縁に当たるとかで、祖父は、そこからだいぶ借金をしていた。後年よく、筒井の借金、筒井の借金といって苦に病んでいた。青森行きは、そのためであったかもしれない。いずれにしても、美谷にいられなくなったからであったことは明らかである。

3. 失 明

青森における7、8カ月は、鉄太郎の生涯にとっては、まことに重要な時期であった。視覚に関する記憶のほとんどは、ここでぎみこまれたものである。

1886年（明治19年）は、全国にわたって、伝染病の流行した年であった。夏の間流行したコレラが、やや下火になって、ほっと一息つく間もなく、今度は恐ろしい天然痘が襲来した。どこの家でも、二人も三人もの^{ほうそう}痘瘡患者をかかえて、途方にくれていた。鉄太郎の家は、相前後して8人の痘瘡患者を出した。中でも一番ひどかったのは、鉄太郎であった。どうせこの世の者ではないと、誰もが諦めていた。しかし、世の中に一人、どうしても諦めかねた人がいた。それは祖父であった。その諦めきれない心が、やがて、不眠不休の看護となった。30日あまりの間、おとなしく寝ていられない鉄太郎を背負って、夜も昼も、積み重ねた布団の上に腰をかけたきりであったという。それは、鉄太郎の記憶の中にも、はっきりと残っていた。

祖母は、常に病床に親しんでいたので、鉄太郎の看護は全く祖父の手一つでなされたのである。実に愛は、執着心そのものである。しかも、その執着心のおかげで、鉄太郎の命が助かったのである。祖父の必死の看護の結果、命は助かったものの、闇の世界に閉じ込められる身となった。鉄太郎の生涯の歴史は、ここにその方向を転ずるにいたった。言いかえれば、障害者として、家族や世間の重荷となり、片すみに追いやられ、さまざまな不自由と苦しみを、耐えしのばなければならない境遇になった。

青森の町から10里ほど離れたところに、猿賀という神社があった。靈驗あらたかな神として、遠くまで知られていた。祖父は、わざわざそこまで行って、鉄太郎のために祈った。そして「もし、あの子の目がなおったら、あの子もわたしも、一生涯鳥や獣の肉を食べません。もしなおらなくても、3年間はこれを断ちますから、どうぞお守り下さるように」と、まごころこめて願かけをした。その事実は、彼の悲しみがどんなに深く、大きなものであ

たかを物語っている。

鉄太郎の失明は、医者の方不注意の結果であったと、祖父は、常に恨みごとのように人に語ったものである。それは熱の高い疱瘡患者に、「風邪を引かせてはならない」というので、6枚折りの屏風を立てまわし、その中に山のように火を入れた火鉢を置き、布団や毛布を、何枚も重ねて寝かせたので、目に障害を起したというのが、彼の言い分であった。

4. 再び北海道へ

このようにしているうちに、1886年（明治19年）の年は暮れた。祖父は、新たに立てた計画を実行するために、家族をまとめて、再び北海の荒海をめざして、青森の港を出航した。彼は、どこまでも海の男であった。2月の上旬、雪は山野をおおい、寒さはきびしく、海は荒れていた。この航海は、容易なものではなかった。船には、多数の雇い人夫も乗っていた。彼らの勇ましい^{はやしごえ}囃声と共に、船は、荒波を乗り切って、日に日に目的地に近づいた。

ところが、懐しい美谷の沖を過ぎる頃、鉄太郎の母とも頼む祖母は、悩みの多い生涯に名残を残しながら、永遠の休みに入った。美谷から2里ばかり行った所に、スツキという小さな漁村がある。ここに禅宗の庵寺があるので、船を寄せて、心ばかりの野辺の送りを営んだ。2月24日のことであった。

男まさりの伴侶を失って、祖父は、とみに力を落していった。彼女の死は、彼の奮闘の歴史に一段落を与えた重大な事件であった。それから後は、彼の頭をもたげる時節は、再び到来しなかった。スツキから2、3里海岸伝いに進んでいくと、ツブトラケという村がある。村といっても、一軒の家も見あたらない、全く無人の荒浜である。この無人の里こそ、20日に近い危険な航海の終着駅なのであった。

そこに家を建てなければ、船から上るわけにはゆかない。家というと大げさであるが、何も面倒なことはない。山から木を切ってきて、小屋を建てるだけである。

祖父は、ここである小資本家と共に、共同で建て網を建てるつもりであっ

た。従って、大勢の人夫を青森から連れてきたのである。この簡易家屋の中には、30人から40人の人達が雑居した。

父西蔵は、青森で、連れ子のある後妻をもらったが、鉄太郎はどうしても「お母さん」とは呼べなかった。父のすぐ下の第三次郎も妻を迎えた。青森の人であったが、大変鉄太郎を可愛いがってくれた。

にしん場の後片付けがすむと、今度は、カラウスという村に移って、ここに住むことになった。カラウスは、ツブタラケから東北へ、海岸伝いに8里程行った所である。ここは祖父の共同経営者・堤三郎氏の家のある所である。

翌年の春も、ツブタラケに行った。にしん場がすむとまたカラウスに帰ってきた。この間に特筆しておかなければならないことは、鉄太郎と父との間柄である。鉄太郎と父は、親子とは名ばかりで、精神的には、まるで関係がなかった。鉄太郎の頭の中には、放蕩に身を持ちくずした父の思いしかなかったからである。そのような父を、「お父さん」と呼ぶことは、この上もなく恥辱であった。愛されるべき者からは憎まれる。愛そうとすれば退けられる。西蔵は、まことに気の毒な人であった。

その父が、またもや大穴をあけていたことが発覚した。祖父は、父と大喧嘩をした。父は、その夜行方をくらませてしまった。後妻の母が、その後どうなったかはわからない。

父が家出してから間もなく、一家は、小田西に移って住むことになった。小田西は、カラウスから2、3里東北に当たっている。鉄太郎の生涯のうち、もっとも懐しい所は、この小田西で、次はツブタラケである。小田西に移ってからも、なお5、6年は、春毎にツブタラケのにしん場に行くことを例としていた。このことが起ったのは、鉄太郎の4歳の時の初夏であった。

第2章 少年の頃

1. 少年の頃

小田西に移り住むようになったのは、鉄太郎の6歳の年からであった。そして春になると、一家をあげてツブタラケのにしん場に引越し、そこに止まっていることが多かった。鉄太郎の家以外に、人家の無いツブタラケには、鉄太郎のほかに子供はいなかった。たまに、にしん場に働く人夫の子供達が来ることもあった。従って、鉄太郎の無二の友は、1匹の猫であった。明けても暮れても、彼は、この猫を離さなかった。

鉄太郎は、猫を連れて野原で草を摘み、川に舟を浮かべ、海で魚を釣った。このようにして、自然界に関する鉄太郎の知識は、内容に富んだものとなった。

盲人の知識は、観念的であるといわれる。それは、盲教育が、教室の中の教育に止まる傾向があるからではないだろうか。「耳学問」という言葉がある。耳から聞くだけでは、観念的または実体の感覚のない、空疎な知識になるのはやむを得ないことである。

自然は、実に大いなる教師である。耳や鼻の感覚で、目の働きをある程度まで補うことはもちろんであるが、殊に、手の触覚によって補われることは忘れてはならない。鉄太郎は、この自然と遊ぶ中で、視覚を除いた残りの諸感覚が、もっとも合理的に発達した。なおその上に、これらの諸感覚を統一し、整理する精神活動が養われていった。鉄太郎は、いかなる動きも制限されることなく、山野に鳥や動物とたわむれ、草木を友とし、川や海で魚を釣り、貝をあさった。このような孤独な生活も、別な意味では鉄太郎の成長に役立つところがあった。

小田西の村には、年々人家が増えていった。次から次へと新しい子供達も

増えてきた。友達ができた。おじさんやおばさんもいた。特に、隣のおばさんは、話上手であった。みんなでそのおばさんに頼んでは、物語を聞かせてもらうのが楽しみであった。鉄太郎は、話を聞くことが好きであった。村に浪花節語りが来たと聞けば、祖父に頼んで、どこまでも聞きに行った。それで話をよく覚えた。岩見重太郎の仇討ちや、元和三勇士^{げんな}の物語などは、始めから終りまで覚えていた。

祖父の家の帳場に雇われていた男で、東半七^{あづま}という人がいた。東京から来た人で、かなり読み書きのできる人であった。鉄太郎は、毎晩彼にせがんで里見八犬伝の話をしてもらった。ある時半七さんが塙^{はなわ}検校^{けんぎょう}の話をしてくれた。武蔵国の片田舎、保木野村に生まれた農家の子、しかも盲目の辰之助が、幾歳月の忍耐と努力の結果、ついに大学者になったこの話は、小さい鉄太郎の心を強く打った。

2. 新しい母

鉄太郎が6歳の時、父は家を出て行方をくらました。翌7歳の時、その父から手紙がきた。旅先で鉄太郎の生みの母さだに会ったというのである。さだは、「置いてきた子供が目が見えなくなった。」と聞いて、「もし、あなたが家に帰るなら、わたしも一緒に帰りましょう。」と言っているが、どうであろうかというのであった。しかし、祖父の怒りはいっこうに解けず、「帰ってきていない。」という返事であった。それを聞いた母さだは、心を痛めながら再びどこかへ行ってしまった。

このことがあってから2、3年は、父から何の便りもなく過ぎていった。ところが鉄太郎が9歳の冬に、その父が突然帰ってきたという噂を耳にした。祖父の怒りを恐れて、直接自分の家に帰ることができず、近所の人に頼んで、祖父のところに詫びをいれてきた。祖父は、決して喜びはしなかったが、世間の手前から父を迎え入れた。父と一緒に暮すようになった鉄太郎も、決して喜びはしなかった。ほとんど「お父さん」とは呼ばなかった。

鉄太郎が11歳の春1893年（明治26年）に、父はまた結婚した。今度の人は、

非常に立派な人柄で、鉄太郎に対してもとてもやさしくしてくれた。鉄太郎もこの人には、はじめから親しみと尊敬とを感じていた。彼はこの婦人には「お母さん」と呼んだ。新しい母ミワも、殊のほか喜んでくれたので、鉄太郎も気をよくして、母親らしいものを、この人の内に見いだすようになった。

母は間もなく女の子を生んだ。名前をとよといい、長く北海道に暮した。この母は、その後末の息子円之丞と一緒に、福島県の平市(現在のいわき市)に暮したが、80余歳の高齢で世を去るまで、親密な交わりをもった。

3. 小学校

11歳の秋、村では大きな出来事が起った。小田西、湯の崎、カリバの三つの村が共同して、初めての小学校を建てた。昨日まですべての行動を共にしていた村の子供達は、今日は、みんな学校へ行ってしまった。それは、盲目の鉄太郎の入ることが許されない世界である。昨日までは、彼らより勝るとも劣りはしないと思っていた鉄太郎の誇りは、踏みにじられてしまった。ついこの間、にしん場の人夫のおかみさんに、「めしいほど人間に似た虫はない。昔は人か目のあとがある。」といわれて泣いて家に帰り、祖父を引張って抗議に行ったことがある。しかし、今になってみるとそれが本当であった。

11月3日は、おめでたい天長節であった。子供達は皆、晴着を着て学校へ行った。とり残された盲目の子は、猫を相手にひとり言をいいながら、淋しい村の細道を、あちらこちらとさまよった。やがて、学校の式を終えて子供達は、「今日の良き日は大君の 生まれたまいしよき日なり」と歌いながら帰ってきた。彼らに出会った鉄太郎は、淋しさと口惜しさを歯をくいしばってがまんした。彼らが立ち去った後、彼は、たまらなくなて泣いた。

昼の間、子供達と共に学校に行くことができない鉄太郎は、夜の夢で学校通いをした。時には、先生になって彼らを教えることさえあった。子供達が学校に行っている間、猫を相手に学校ごっこをした。美しい空想の行きつくところは、悲しい涙であった。楽しい唱歌に耳を傾け、勇ましい体操のかけ

声を聞きながら、一人断腸の思いをしていた。

4. 鍼按の修業

このような中で、13歳の春を迎えた。今のうちに、何か生計の道を覚えておかなければならないというので、鍼按を学ぶために、青森に行くことになった。ちょうど青森の人で、にしん場の手伝いをしていた人のよい夫婦がいた。この人達に連れられて、5月のはじめ頃、住みなれた小田西に別れを告げることになった。

その当時の青森は、まだ市ではなかった。しかし、ツブタラケや小田西に育った13歳の盲児にとって、それは実に大都会であった。鉄太郎は、堪えがたい淋しさに泣いた。しかし、幸いにも青森の町にその人ありと知られた、高井軒益という鍼医の門に入ることができた。師匠は、盲人の中でまれにみる大人物であった。特に開けた考えの持主で、門生には、従来の鍼按学に止まらず、近代医学をもととした新しい鍼按学を学ばせた。自分は、そういう知識を持っていないというので、わざわざ立派な医者に頼んで、弟子達をそこに毎日習いに通わせた。まず兄弟子が習ってきて、それをそのまま口うつしに弟弟子に伝えるのである。だから、兄弟子の覚え間違いもそのまま鵜呑みにしてしまうこともあった。「あまねく」というのを「やまねこ」と聞き誤って、その通りに弟弟子に教えたという滑稽なこともあった。

学校に行ったことのない鉄太郎が、まず第一に、人体解剖学というむずかしい学問にぶつかった。「人体は骨と軟部よりなる。」何のことかわからない。鉄太郎は、この近くに南部という所があるので、それに違いないと思いこんでいた。更に、生理学の総論においては「およそ宇宙間の物質を分けて二種となす。一つを有重物質といい、一つを無重物質という。」重さのあるのは物質で、重さのないものはいわゆるエーテルであることは、わかりきったことであるが、わかりきったことがいっこうにわからない。

このようにして、3年程の間に、かなり大部な解剖、生理、病理と一緒にすみからすみまで覚えていった。もちろん、例の「やまねこ」式の部分が

くらでもあることはまぬがれないところである。それでも「読書百遍、意自ら通ず」とあるように、毎日毎日そればかりくり返している内に、次第にその意味がわかってくるものである。このようにして、鉄太郎の頭の働き方が、科学的になっていったのである。

5. 点字との出会い

鉄太郎が、高井軒益のもとで修業中に、二つの大きな出来事に出会った。その一つは、東京盲啞学校の存在を知ったことである。弘前から、東京盲啞学校で学んでいる中嶋健次郎という人が訪ねてきた。盲人でも勉強できる学校のあることを知った鉄太郎は、盲啞学校に行く願いを強く持った。しかし、悲しいかな、貧しい漁師の子であり、あまりにも遠い東京に行くことは、とうてい不可能であった。だが、その願いを心の奥深くにきざまれたことは、鉄太郎の将来を大きく変えていく源になった。今一つの出来事は、中嶋健次郎の来訪によって、点字の存在を知ったことである。中嶋の弟子で、高坂という人がいた。高坂は、点字をよく知っていた。鉄太郎は、高坂について点字を習った。はじめて自分で書いたものを自分で読むことができた時の喜びは、何ものにも比べようのないものであった。高坂氏は、中嶋氏に頼んで、東京で鍼按要論の解剖篇から病理篇まで、全巻15冊を写本してもらった。これは、東京盲啞学校の鍼按科の主任・奥村三策先生の著作で、盲界における権威ある書であった。

東京から手に入れた本というので、虎の子のように大事にしていたが、鉄太郎は時々、これを借りて読ませてもらった。一人で本を読めた時、鉄太郎は、いい知れぬ感激を覚えた。

6. 帰郷

鉄太郎は、青森における3年間の鍼按の修業を終えて小田西に帰った。16歳の春であった。小田西では、祖父をはじめみんなが喜んで迎えてくれた。

青森での話がつきと、今度は、ひまを持てあますようになった。ところが、ふとしたことからそれが解消された。

青森に行く前に一緒に遊んでいた子供達は、まだ学校に通っていた。中には尋常科を卒業して補習科に入っているものがいた。鉄太郎は、彼らに伴われて毎日学校へ遊びに行くようになった。校長兼教員の上林先生は、喜んで鉄太郎を迎え、補習科に席を与えて、傍聴することを許してくれた。晴眼者の生徒の中に、盲生徒が一人混っているので、はじめは何となく恥ずかしいような気持であったが、慣れるに従って平気になった。運動場に出て、できるだけ遊戯にも加わった。特に目かくし鬼は、鉄太郎の得意で子供達も喜んだ。教室の中では、国語の勉強に少なからず興味を持った。ソロバンを手にとって二一てんさくの五とやってみると、案外手ぎわよくゆくので、これに勇気を得てソロバンに熱中するようになった。わずか2、3カ月の間に、6桁の加減乗除が自由にできるようになった。これなら晴眼者の生徒に負けないという自信がでてきて、更に一生懸命になった。従って進歩も著しいものがあった。

ところがまた、彼らに負けることができた。彼らは分数を習いはじめたが、これはソロバンではどうしてもできなかった。またしても無念の歯をくいしばった。そのことから思い起すのは、東京の盲啞学校である。そこでは、盲人でも分数ぐらい自由にやってのけられる方法が、いくらでもあるに違いないと思うのであった。

小田西から3里も離れた原歌まで行かなければ、医者はいなかった。しかし、病人がでることはいつでも同じである。そこで鉄太郎が習ってきた鍼や按摩が大いに役に立った。「腹が痛むから来てほしい。」「腰が痛いから鍼をしてくれ。」「風邪を引いて頭が痛いからもんでほしい。」と、日に日に患者が増えていった。時には2里も3里も離れた所から頼みにくるようなこともあった。技術がよいのか、病気が単純なのか、不思議によくなおった。小田西の村は、若い鍼医にとってよい実習の場であった。治療に対する自信も次第に増していった。しかし東京の学校のことはどうしても忘れることができなかった。

ある人にこのことを話すと、「ひとつ規則書を取ってみるがいい。」と言われた。早速手紙を書いてもらって出してみると、14、5日目に規則書がとどいた。はやる気持を押えながら、その人の所へ持って行った。

世界広しといえども、学校の規則書を全部暗記する人が、どこにいるだろうか。鉄太郎はそれをしたのである。

第1条、本校は、盲啞の子弟を教育し、自活の道を得しむるをもって目的とする。というところから、20何条もある規則をすべて暗記し、なおその裏を返して学校、課程、教職員の氏名、設立者の芳名など、一字一句も残さず暗記してしまった。そして、毎日これをくり返しては、心は東京に飛んでいった。東京から、点字板を取寄せたのもこの頃である。はじめて自分の点字板を手にした時は、天にも昇る気持であった。早速、上林先生の所へ行って物理学の本を読んでもらって写しはじめた。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

参考文献

- 熊谷鉄太郎著「闇を破って」盲人牧師自叙伝 1931年3月18日 基督教出版社発行 第5版(1936年9月)
- 熊谷鉄太郎著「薄明の記憶」人間の記録双書 1960年7月15日 平凡社発行
- 好本 督著「主はわが光」1981年6月20日 日本基督教団出版局発行
- 鈴木 力二著「中村京太郎伝」1969年12月20日 中村京太郎伝記刊行会発行
- 関 宏之著「岩橋武夫——義務ゆえの道行」(盲先覚者伝記シリーズ 1)
1983年9月1日 日本盲人福祉研究会発行
- 岩橋 英行著「青い鳥のうた——ヘレン・ケラーと日本」1980年10月20日
日本放送出版協会発行
- 本間 一夫著「指と耳で読む——日本点字図書館と私」1980年11月20日 岩波書店発行
- 石松 量蔵著「盲人とキリスト教の歩み——盲人伝道百年史」1959年7月15日 日本盲人基督教伝道協議会発行
- 「盲人伝道20年の歩み」1971年12月1日 日本盲人基督教伝道協議会発行
- 「盲人伝道30年の歩み」1981年3月1日 日本盲人基督教伝道協議会発行
- 「^{なんみ}南美宣教五十年史」1936年11月1日 南美宣教50年記念運動事務所発行
- 日本メソジスト教会第30回 東部・西部年会記録 1937年
- 土肥 昭夫著 「日本プロテスタント・キリスト教史」 1980年7月30日
新教出版社発行
- 海老沢有道、大内 三郎共著 「日本キリスト教史」 1970年10月30日
日本基督教団出版局発行 第7版(1980年)
- 札幌教会75年史「川畔の尖塔」1964年9月13日 日本基督教団札幌教会発行
- 日本基督教団東梅田教会95年の歩み 1982年2月 日本基督教団東梅田教会発行
- 日本基督教団御影教会90周年記念誌 1981年1月25日 日本基督教団御影教会発行
- 高橋さやか編、福永津義著「母の書」1983年12月15日 ヨルダン社発行

盲先覚者伝記シリーズ No. 3

熊谷鉄太郎

— 見果てぬ夢 —

1985年6月1日初版発行

1998年1月30日第2刷発行

定 価 800 円 (送料 210 円)

著 者 玉 田 敬 次

発行者 高 橋 実

発行所 社会福祉法人
視覚障害者支援総合センター

〒167-0043 東京都杉並区上荻

2-37-10 Keiビル3F

電 話 03 (5310) 5051

振替口座 00110-4-576094

印刷・製本 東京
墨田 合同印刷株式会社

〒130-0002 東京都墨田区業平

2-9-13

電 話 03 (3624) 6111

日本盲人福祉研究会

定価800円